報徳＠なう

12月号

●報徳食品支援センターニュースレター「報徳＠なう」
Vol.01 / No.005
●発行所
ＮＰＯ法人 報徳食品支援センター
●発行人：田嶋　享
●編集人：本岡俊郎
●編　集：千葉哲也
●電　話：０７０－８５５５－２１８９
http://小田原報徳フードバンク.com

フードバンク活況を憂う年！

ＮＰＯ報徳 一周年で大躍進するも喜べず！

この十二月二十四日で、報徳食品支援センターが特定非営利活動法人（ＮＰＯ法人）になって一周年を迎えます。設立当初は主に高齢者を対象に活動する予定でしたが、コロナ禍によって、「ひとり親家庭」や「貧困層」を重点的に支援することになりました。

特に、箱根の観光業で生計を立てている世帯は、収入が大きく落ち込み、今後どこまで持ち直すかは神こそ知れ、政府も成す術がない状況です。ＧｏＴｏトラベルが来年半ばまで続くことを考えると、その後になってコロナ感染は第何波も発生するでしょうから、来年いっぱいはコロナが収まらない可能性が高いと考える人も多いようです。

そうなれば家計がますます苦しくなる世帯も増えるはずで、ＮＰＯ報徳食品支援センターとしても相当に忙しい日々を送る覚悟です。フードバンクがヒマになる日が来ることを切に願います。【文責・編集部】



↑常温保存の生うどんも大量に入荷。



↑ギフトセットを解体して空いたスペースに季節の食品を入れていく。

コロナ禍でフードバンク活動が一般的に知られる事になった一年

十一月下旬からコロナ禍が勢いを盛り返し、小田原箱根地区の観光はＧｏＴｏ政策で賑わっていたのも束の間、今は再び先が見えなくなりました。この春以来、全国各地のフードバンクは生活が困難に陥った方達への救済で多忙を極めました。配布実績が昨年同期に比べて２倍・３倍に急増した所もたくさんあり、スタッフが過労で倒れてしまったところもあります。しかし、良いこともありました。それはフードバンク活動の社会的な存在価値が広く認められた事です。

そのフードバンク活動を支えるための助成金もいろいろと提供されました。私共も中央共同募金会「赤い羽根」から多額の助成金をいただき、２坪の広さの冷凍庫を設置できました。この冷凍庫のおかげで、冷凍野菜や冷凍食品をお渡しできるようになりとても喜んでいただいています。

私は、フードバンク活動に取り組んで十二年目になりますが、誕生したばかりのＮＰＯ法人に、「赤い羽根」のような大きな団体が助成金を出して下さるとは、最初は信じられませんでした。それほどにも中央共同募金会がフードバンク活動の重要性を認識されたからだと確信しました。コロナ禍に対するフードバンク活動も長期戦になります。このような助成も続くかと思いますので、うまく情報を集めながら運営していくつもりです。【副理事長　本岡俊郎】



↑１トン以上の食品を保存できる大型冷凍庫。



↑冷凍食品の提供が可能になったインパクトは大きい。

報徳食品支援センター
新電話番号

おとな 親子 GoGo! フードバンク

070-8555-2189

１１月の主な食品配布実績

【１】１１日：箱根はまゆう会・湯本茶屋　６０世帯
【２】１７日：箱根はまゆう会・宮城野　１３０世帯
【３】２８日：開成町母子寡婦福祉会　１９世帯
【４】２８日：カーサ・デ・アミーゴス（三島市）
【５】郵送：フードバンク・二本松（福島県）



↑箱根町のさくら館（宮城野）での食品配布の様子。

【理事長より】

●小さく始める農業に注目

私は現役時代に三十年間は青果市場に行き、ヤッチャバで毎朝仕入れをしていました。

当時は地元では久野、大井町、中井方面から多く出荷されていました。その後、生産者の高齢化で人手不足となり、市場側から地域の集荷場に行き、市場の運営が成り立っていました。

小田原青果市場は、４か所の市場が２つになり、一つになり、小田原市が運営管理をしています。開設当時から見ると、売上は二十％くらいに減っていると思います。現在では農家の方やＪＡの関係者が朝どれ市場さんを運営したり、全国の道の駅でも農産物は積極的に販売されています。そこで私はこれからは小さな農業を始めたら良いのではないかと思っています。

【理事長　田嶋　享】



↑田嶋理事長は随時、農業体験会も実施。

【これからの活動予定】

★箱根はまゆう会
●十二月一日（火）
箱根町＠仙石原星槎学園
●十二月七日（月）
箱根町＠芦ノ湖畔
●十二月十一日（金）
箱根町＠湯本神明町

★小田原市母子寡婦福祉会
●十二月二十日（日）
＠報徳食品支援センター

★大井町
●十二月二十三日（水）

★松田町
●十二月二十七日（日）

【ボランティアの募集】
http://小田原報徳フードバンク.com/問い合わせ/
当ＮＰＯでは、食品の仕分け配送等のボランティアを募集中。（担当：本岡）

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

●編集後記

＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

お米と肉が足りない…贅沢を言うつもりはないが、寄贈される食品でこれらが足りない。育ち盛りの子どもを抱えたひとり親家庭を支援するため、発想を変えて助成金で購入することを決断。資金支援団体の理解も得られたのが吉報。（哲）